

## 北海道地理学会創立50周年記念シンポジウム

## 北海道における環境と開発

## —地理学が果たしえる役割と今後の展望—

北海道地理学会副会長 高橋 伸幸 (北海学園大学工学部)

## シンポジウムの趣旨

21世紀を目の前にした今、20世紀を振り返った場合、地球上の諸現象を扱う地理学は学問の世界において、また社会において一体どのような役割を果たしてきたのであろうか。そしてその結果、何を解決し、何を21世紀への課題として提起しえるのであろうか。現在、地球温暖化を始めとする地球規模での環境問題が注目され、すでに我々の生活や生命までも脅かされるような事態が生じている。その中で、まさに人文現象から自然現象までを対象とする地理学こそが積極的に環境問題に関わっていくべきであり、地理学の果たすべき役割は大きい。期せずして北海道地理学会は創立五十周年という節目の年を迎える。そのちょうど良い機会として、地球環境を見据えつつ、まずは身近な北海道に目を向け、そこで地理学が果たしえる役割と今後の展望について改めて考えてみたい。

ところで、環境問題は、一つの学問分野で解決するには、問題が多岐にわたり過ぎている。しかも、一つの問題が解決されたとしても、相互の問題の関連性が把握されない限り、環境問題の全体的な解決には至らない。例えば、地球温暖化問題にしても、その原因と考えられている温室効果ガスの排出問題から始まって、その大気中での循環、分布、濃度などを考慮した影響評価とともに今後の予測が大きな問題となってくる。また、そこから派生する海水の膨張や氷河の融解に伴う海水準変動と沿岸部での海岸侵蝕や高波の影響なども考えなければならない。さらに、海洋条件が変化することで気候へのフィードバック効果も考慮しなければならない。一方、陸域では、氷河の衰退・消滅に伴う露岩域の拡大、永久凍土の融解、乾燥地域・湿潤地域の移動に伴う土壌生成や地形形成過程の変化など地因子に関わる問題が各地で出現する。当然、気候・地形・土壌条件が変化すれば、植生への影響も顕在化するであろう。それは、自然植生に止まるものではない。農業活動へも影響が及び、食糧問題を引き起こし、農産物の流通を通して経済問題、政治問題へも発展することは必定である。改めて温室効果ガスの排出問題を見た場合にも、諸人間活動がその根本原因にあることは明らかである。中でもエネルギー問題はその中心課題であり、人間活動のあらゆる分野において関わりをもち、とくに経済活動や生活の質においては表裏一体の問題である。しかも、このことが各国の思惑と結びついて、政治問題化し、解決への道を遅らせている。

このような地球規模での環境問題と同時に、国内あるいは地域内での開発と環境の問題は我々の生活により身近な次元にある。それだけに解決が急がれる問題ではあるが、一方でその問題解決への方策に対し国民や地域住民の合意を得るための十分な議論も必要とされる。そのためには、まず開発・環境問題の中で各分野において携わっている人々が、それぞれの立場、観点から十分根拠のある的確な資料を提示すべきである。そして、その資料の妥当性を異分野の立場からも相互に検討した上で、それぞれの関連性、影響の度合いなどを評価すべきであろう。その結果として、現実に即し、さらに将来を見据えた結論を見つけ出しなければならぬ。ここにおいて諸現象を総合的に捉えることを基本理念としているはずの地理学の役割が重要になってくる。

ところで、各学問分野とも全般的に細分化が進み、狭く深くという傾向が顕著のように思われる。地

理学においてもその傾向は認められる。学問の成り行きとしては当然のことと言えるし、その結果として科学文明の目覚ましい発達が成し遂げられてきたことも間違いのないであろう。とくに20世紀における科学技術の進歩は加速度的であり、その恩恵を生活のあらゆる面で我々も享受してきたように思っていた。ところが、その一方で20世紀には各種の環境問題が顕在化し、世紀末においては地球全体を覆うまでになった。一体何がその原因であったのか？学問分野が細分化し、中でも最新の先端分野に注目が集まり、周辺分野の存在、隣接分野との有機的な関連性を意識しなくなった結果ではなからうか。そして我々の生活の唯一の拠り所である地球が、一つのシステムとして機能し、我々人類もそのシステムの一員であるということを忘れていった、あるいは無視するようになったことが大きな原因ではないか。

さて、北海道という身近な地域に目を向けたとき、北海道は、日本の中では比較的自然がよく残され、自然度が高いという評価がある。これは、人口密度が低く、開発の歴史が浅いということによるところが大きい。しかし、経済不況も手伝い、公共事業を中心とした開発が目立つようになり、自然保護との対立が大きな社会問題となってきた。このような中で、開発の必要性や有効性と自然の重要性や貴重度を見極める目と、何より将来を見据えた、環境に対する総合的な判断力が要求される。そして、より多くの北海道民がこのような目を持ち判断力を持つことにより、より適切な開発と自然保護を行うことができるようになるのではなからうか。幸い、北海道地理学会は、研究者、教育者、行政担当者、企業関係者および地理学に強い関心を持つ一般の人々など、各分野、各立場のメンバーによって構成されている。したがって、開発や自然環境・自然保護に対する見方、意見も様々であるが、その反面、北海道地理学会という場において、多面的に議論し、時には総合的に意見を集約することも可能である。

「環境」と「開発」という対立しながらも調和していかなければならない問題に対して結論を見出し、いくことは容易ではない。しかし、これからの北海道における「望ましい環境と開発」を考える場合、「地域開発」、「環境保護」、「環境特性の把握」、「環境教育」などの面において、現状を把握し、どのような問題と課題があるのか考えていく必要がある。北海道地理学会創立五十周年記念に際しシンポジウムが開催される運びとなった。ここにおいて、地理学研究者を始めとして、他の学問分野の研究者、行政や教育の専門家の方々に上記の項目に関連した報告を頂き、有意義な討論を通して、地理学の果たしえる役割と今後の展望について考えることができたら幸いである。